先天性甲状腺機能低下症の早期発見に関する研究報告書

久留米大学医学部小児科　山下文雄
林　真夫
江崎泰之
行実成徳

1. スクリーニングで発見されたクレチン症

女児6例，男児2例をfollow up している。症例のうち未熟児2例，CHD 3例（全てPDA）があった。治療開始は精査来院時に依存しているが，1例（4生日より治療開始）を除き16生日より66生日の間に開始している。初診時の臨床症状はチェックリストで4～6点（1例のみ1点）であった。CHDやDown症候群を合併している症例では臨床症状の判定が困難であった。クレチン症児の発育に関しては，死亡した1例を除き7例において検討した結果，5例は正常の発育を示し，骨年令/歴年令も正常範囲内であった。他の2例（1例はCHD，CHF，他は未熟児CHD，Down症候群合併）において発育遅延が認められた。

治療開始とIQの関係は本スクリーニングにおいて非常に重要な問題である。我々の症例ではfollow up 期間が短く，IQ測定の可能な症例が少ないが，津守・稲毛式と田中・ビネー式を施行し，DQ，IQを測定し検討した結果，①合併症（CHD，Down症候群など）をもった症例においてDQ，IQの低下が認められた。②治療開始が早期であったにもかかわらずIQの低下を来した1例（症型は不明）がある。この症例は今後重要な問題を含んでいる。

2. スクリーニングで発見された一過性高TSH血症

女児4例，男児1例をfollow upしている。4例はチェックリスト0点，1例のみ2点でスクリーニング時のdisc TSH値はクレチン症に比して低く，100μU/mℓ以下であり，大腿骨遠位端骨核径も全て5mm以上であった。

3. 甲状腺疾患児の心機能

非観血的な心エコーを用いて甲状腺疾患児の心機能を検討した。対象は甲状腺機能低下症児8名，甲状腺機能亢進症児4名であった。甲状腺機能低下症児のLPEP/LVET値は0.36±0.07と正常に比し有意にSTIの延長を認めた（P＜0.001）。また機能亢進症児では0.22±0.01と正常に比し有意の短縮を認めた（P＜0.001）。

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

1.スクリーニングで発見されたクレチン症
2.スクリーニングで発見された一過性高TSH血症
3.甲状腺疾患児の心機能